

日本労働年鑑 第24集 1952年版

The Labour Year Book of Japan 1952

第二部 労働運動

第三編 農民運動

第二章 供出と米価をめぐる闘争

第三節 二五年度産米供出闘争

二五年度産米の予想収穫高(一〇月二五日現在)は六二、八七五千石であり、事前割当基準収量は六三、二八一千石で差引四〇六千石の減であるが、一〇月三〇日政府側は補正五、二〇四千石追加供出一、五二四千石、超供期待量七〇〇千石で、結局差引減額二、八〇〇千石の案を決定し総司令部との接衝に入った。政府がこのようなかえ目な供出量を決定した理由は、麦供出の行きすぎを是正し、あわせて五一年春の地方選挙に対して政治的考慮をなしたのではないかと見られたが、他方政府の十月末主食保有高が約二〇、〇〇〇千石に達し、これは四カ月半の配給量に相当するから食糧事情に相当な楽観をいだいたことにもよるであろう。しかし朝鮮事変以来主食輸入量は激減しておりまた東南アジアの情勢悪化が予想されているから決して手放しの楽観の行われようはずはなく、ここから政府の興農一割増産の掛声も出て来たのである。また強権的な供出の強行によって農民層の政治的な支持を失うことを避け、ある程度の妥協をはかったと見られぬことはない。新米の米価も農民団体の要求にかなりの歩みよりを見せたのも、とくに富農中農層に一応の満足を与えようとする政府の意図と見られぬことはない。しかし実質的には高米価に利益をもたぬ貧農については、このことは必ずしも妥当しない。後者はむしろ供出問題においてつねに自家飯米確保、税金減額等に最大の関心をいさぐるのであり、供出闘争はこの意味で戦後農民運動の主要闘争分野となり、小貧農の最後の抵抗線となって来たのである。それは資本の農民収奪に対する抵抗として、その相手が直接には国家権力であり、税金闘争とならんで最も重要な農民運動を展開したのであった。

では農民組織は供米闘争をいかに展開したか。米価については次節でのべるとして、まず供米闘争が部分的ではあるが尖鋭化した供麦闘争のあとをうけて、その発展としてたたかわれたこと、税闘争と結合したこと、広汎な小貧農の生活防衛闘争の性格がつよいこと等を指摘することができよう。また供米闘争は官僚的な米検制に対する闘争をもふくむことを示している。また農民組織の戦術についてかなりの反省と批判が行われたことは注目されてよい。その一つの例として、「かくし田摘発闘争」の評価がある。「かくし田」闘争は戦後土地問題とむすびついた供出闘争の重要戦術として日農とくに共産党系農民組織の強調したところであるが、それによれば農村にのこる半封建性の拠点として、また「地主富農」の農村支配の支柱として「かくし田」が重視され、かくし田を摘発し「農民が裸にならねば独占資本とは闘えない」として村内の闘争ではいつでも持ち出された。しかるに日農統一派第二回中央委員会の討論にみられたように、「かくし田」は全体として農民の生活防衛の手段となり独占資本に対する抵抗となっている点が指摘され、闘争目標は「反動的な富農」の不当なかくし田摘発とすべきである、これは反帝闘争の一環として闘わるべだ等が力説された。(第六章第四節日農統一派二中委の項参照)また戦後の農民運動をきびしく自己批判し供出闘争の意義を高く評価し

た「農民運動」紙によれば、従来の一般的なかくし田重視の見解は「農民の必死の、だがまだ消極的な抵抗の中にひそんでいる革命的な要素を、本来の敵にぶっつけてゆく中で農民の革命性をひろげてゆくという考え方ではなく、農民の革命性を信ぜず、ハダカにならなければ本当に闘えないという農民を侮蔑した考えなのだ。」「カクシ田摘発の方針は供出闘争の方向を混乱させる上で大きな害毒を流した」(同紙第三・四号五一・三一五)として、階級関係全体との関連を忘れたかくし田闘争理論の害毒を指摘している。いずれにしろ従来の供出闘争に対する深刻な反省と自己批判が組織の内部から生れて来たことは注目されてよい。

さて供米補正が予想より多かったことが影響して、とくに中農以上層は供米闘争に熱意を感じない傾向が生じたことは事実であるが、たとえば三重県では一六八千石の補正と二三千石の超供を決定したが、部落では思ったより補正が多かったため「中農層あるいは中農的立場によって指導されている日農支部や細胞では、本年の供出闘争はだめだ、敵が巧妙な手をうった、という態度で投げだしている」。(日農統一派本部「農民運動資料」第一六号五一・二・五)ところが準供出農家、転落農家には生産補正はなされていない。その結果割当量を供出すれば保有米を割るのが実情である。

このように全般的には予想外に補正の大きかったこと、米価も農民団体の要求に近かったこと、それが中農以上の経済的利益と一致し、少くともその関心を供出に向けることに成功し、供出成績は昨年度に比べ良好であった(一二月二〇日七三・三%で昨年同期は六六・五%、五一年一月二〇日一〇〇・二%)。しかし農民層の中でも負担の重い小貧農層を中心に、部分的ではあるが強い抵抗が、とくに強権的供麦の発展として闘われたところでは、きわめて激烈におこなわれた。それらは個々の事例について見られたい。

日本労働年鑑 第24集 1952年版

発行 1951年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年6月1日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1952年版(第24集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
